

## 自分の責任

坪井あき子

二〇一二年四月、ある地方紙の投稿欄に、東日本大震災のがれき処理について次のような趣旨の意見が載った。

「一時はボランティアや義援金などでみんな協力したが、のど元過ぎれば、なのでしょいか。自分の住んでいる地域だけは協力してほしくないと思っている人も多いということなのでしょいか。とても情けない。」

被災地のがれきの放射線は測定され、危険なものとは他の地方へ運ばれないはずです。被災地の復興の足かせとなるがれき処理だけは全国の自治体に一致協力してほしいです。」

(五〇代女性)

私はひどく違和感を覚えた。同時に「みんなで助け合おう」という大合唱の果ては、こういう方向に行くのかもしれない、とおそろしくなつた。そして思った。「もしがれきに少しでも放射性物質が含まれていて、それが全国へ拡散をつづけたら、あなたはどうか責任をとるのですかと尋ねたい、と。」

こういう方向にいくと「責任の所在」も「その発生源」もぼやかされてしまうのだ。勝手に放射性物質をばらまいて、そのあと始末は「国民のみなさんで」ということになってしまうのだ。

砕石場から運び出された石がコンクリートになつて建物の土台や壁に使われ、アパートが建ち、人々が入居してから放射能が出ていることが分かった、というニュースがあつた。ニュースにならない事実がまだまだあると思わねばなるまい。

地方自治体の責任者や庶民は、今の時点で政府の発表を信用していない。福島原発の炉の中がどうなっているのか、今後どうなるのか、その見通しも示さず「収束宣言」を出したり「再稼働」を言いだす政府に不信をつのらせているのだ。

福島原発の重大事故で人々は「この地震大国に五四基もあつたとは」とおどろき、ショックを受け、それぞれ「考え」た。「原発利益共同体」

のことも知るようになった。  
私はさらに——と考えてしまう。「原発」を受け入れた自治体、住民については、問われぬのか、と。

原発に賛成した首長、議員（彼らの力は大きい）、反対した議員、また賛成の旗ふりをした住民、反対運動をねばり強く続けた住民についてはどうなんだ、と。

全村民が避難生活を強いられている飯館村の菅野典雄村長は、放射能被害の特異性を告発。「村として、一人ひとりの復興に向き合い、同じ方向を向けるよう必死にとり組んでいる」と訴え、福島第一原発が立地する双葉町の井戸川克隆町長は「国と東電の説明を信じてきたことを悔いている」と述べた——という新聞記事を目にした。彼らは、まだしも自己の良心にまっすぐ向き合っている。しかし、「賛成多数」で手を挙げ「決定」に加わつた議員たちの行動は、伝わってこない。

三一年前、「青年劇場」が「臨界幻想」という劇を上演したことがあつた。

原発で働く一青年の死から、そこで働く人たちの悪条件、隠ぺい工作などを告発したもの。

劇団員たちは「原発のある町と立地予定地を巡演した。そこに「反対運動」があつたから。

浪江町もその一つ。当時、町議会は浪江・小高原発の誘致決議をあげていた。

警察の嫌がらせ、町議会の原発推進派議員からの攻撃、町は公演直前、会場使用料を九倍に釣りあげる――。

それでも公演は成功した。一〇〇人来てくれるかなと心配していたが、体育館は八五〇人ですっぽいになった、という。

その当時の、個々の住民たちは、今、故郷に帰れずちりちりになって、どのように当時を振り返っているのだろう、と私は思う。

冒頭の投稿者のように「苦しみはみんな分かちあいましよう」という盲目的な善意には要注意である。とても無責任な発言だからである。一人ひとりが「自分の責任」ということを自覚しなければ、と思う。

(つばい あきこ)